

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「ばらこくたい に さんじょっばらい」

「おおばらばらこくたい」これは有名な新潟弁のひとつです。昭和39年新潟で国体が開催されたと思っただけで、新潟地震が起こったため町中が大騒ぎのめちゃくちゃ状態になったことから「ばらこくたい（国体）」「大ばらこくたい（国体）」というようになった、というのは全くのてんぼ（嘘という新潟弁）です。

さて、去年の国体を始め、何かとばらこくたいなことが多かった一年が無事過ぎ、新しい年が始まりました。今年も、新潟のしかかもかおもしろ話をお届けいたしますので、よろしく願いいたします。それにしても、ばらこくたいという言葉は、部屋が散らかり放題といった感じをうまく表現していると思います。

この「ばらこくたい」をさらに散らかして、後始末せず、そのままの状態にしてどこかに雲隠れしてしまうことを、「あと、さんじょっばらい」と言い、これまた県内ではよく耳にすることばです。「おおばらこくたい」状態は、文字通りイメージできますが、この「さんじょっばらい」の解釈となると、一筋縄ではいきません。

一般的には「さんじょっばらい」は「三条払い」と思われていて、金物の町三条商人の商魂たくましさや、いい加減さを揶揄する言葉、ひいては三条人の性格を意味すると思われているふしもありますが、三条市民のためにあえて言います。「さんじょっばらいは、三条人のことではない。商い用語・業界用語、全国区の方言である！」ということです。

三条は、五十嵐川と信濃川の合流地として古くから河川交通で栄えた地。元禄のころより「金物の町」でもあり、かつては、「呉服の町」でもありました。また、北陸道から奥州街道への宿場町で人

的・物的交流の盛んな地でした。特に呉服商人は、京から来て、まず三条で荷を下ろして、新潟から下越地方に、長岡から上越地方へと行商したといえます。このとき、「商いはまず三条で、支払いも三条で」ということで、「三条払い」になりました。これは、いわば商人間の符牒で、業界用語でしたが、中には悪徳商人もいて、支払いをしないで帰ってしまう京の商人もいたようです。これが転じて三条払いは「支払いをしない人。後始末しない人」の意味になったらしいのです。さらに、行商で売れ残った品を三条商人が引き受けたため、「残りは三条で払う」が、いつしか「残ったら後は三条で払ってもらえばよい」ということになり、それが、「後始末は三条で」との意味で、とうとう「さんじょっばらい」は、ほったらかしの意味になってしまったのです。

また、三条は京都の三条の地を表したという説もあります。このほか「さんじょっばらい」は「参上払い」で、支払いはこちらが出向くからそれまで待ってほしい、といった奥ゆかしい？支払い猶予のお願い用語という説もあり、ますます三条商人への疑いは晴れそうです。

筆者の調査では、埼玉、山梨、広島の地で「三重（さんじゅう）払い」という古語があり、支払いを延ばすことが転じて、後始末をしないことの意味で使われていたことがありました。ひょっとして「サンジュウ」を三条の地名にひっかけながら「サンジョウ」に転じて、「さんじょっばらい」になったのかもしれませんが。

さあ、新しい年、寅の年は何かとエキサイティングな年ともいわれますが、ばらこくたいや、さんじょっばらいとは無縁な穏やかな日々でありますように。

